

を少しでも高くなる様に考慮すべきである。更に重要なことは排水の良い圃場を選ぶことと共に、圃場全体に排水溝を設けることである。

(3) 耕耘整地はことさら丁寧にしなくてもよい様で

ある。動力耕耘機を使えば、碎土が細くなり労力も軽減されて良い。尚、稲刈後の耕耘整地は適当な土壌水分含量の時に行う様に考慮されねばならない。

(文献省略)

## 筑後クリーク地帯における1, 2の盲点(予報)

世戸口信孝・森山義一

(福岡県農試筑後分場)

### 1. ま え が き

筑後のクリーク地帯は、約12,000町歩の水田と、約350町歩のクリークから成り、立地、土壌条件共に恵まれ自他共に北九州の穀倉地、米どころと考えていた。ところが、福岡県における米作日本一競作会の結果、増収賞1位が八女郡黒木町の中山間地に昭和31、32年と相次いで出来あがり、クリーク地帯稲作の今後の栽培のありかたが重要な問題となつてきた。そこで

吾々は手始としてクリーク地帯(三潴郡大木町熊丸連蔵氏〔昭和30年度九州1位〕)と中山間地(八女郡黒木町平島仁助氏〔昭和32年度九州1位〕)の成熟期における稲株の調査、比較を行いそれらを中心として稲作の盲点を考えてみた。なにぶん調査に着手した時期がおそく大部分の問題を今後の調査に待たねばならない現状であります。御指導をお願いし今後の研究を行いたいと思います。

第1表 耕種の概要並に反当収量

	八女郡黒木町 平島仁助氏	三潴郡大木町 熊丸連蔵氏	当 場
苗代様式	三潴式苗代	〃	〃
播種期	5月10日	5月22日	5月25日
播種量(坪)	2.5(浸 粳)	3合(浸 粳)	3合(乾 粳)
苗代施肥量 (坪当)	堆肥1貫。油粕40匁。人糞尿1貫。	堆肥1貫。油粕40匁。過石20匁。塩加15匁	堆肥670匁。油粕67匁。硫安4匁。過石7匁
本田元肥 (反当)	堆肥600貫。石室4貫。熔燐8貫。塩加2貫。	堆肥400貫。石室5貫。トーマス燐肥10貫。配合6貫。マグカル20貫。尿素1.5貫	堆肥200貫。硫安6貫。過石7貫。塩加4貫
本田追肥 (反当)	木灰30貫(5/7)。油粕5貫(13/8)。尿素2.5貫(7/7。13/8)	尿素1.5貫(15/8)。塩加1貫(15/8)	硫安2貫(19/8)
挿秧期	6月23日	6月28日	6月29日
栽植密度	64.8株	8寸×7.5寸 60株	8寸×7.5寸 60株
中耕除草	雁爪1回、手取3回	雁爪2回 手取1回2-4-D(30/7)	除草機3回、手取1回
病虫害防除	パラチオン剤3回 セレスン石灰3回	パラチオン剤2回、PB粉剤1回、モンゼット2回	パラチオン剤2回 PB粉剤1回

	反当玄米重	粳摺歩合	玄米一升重	屑米歩合	反当玄米容量
平島仁助氏	197.5 貫	82.9 %	397 匁	0.2 %	4.97 石
熊丸連蔵氏	162.8	82.0	391	0.6	4.16
当 場	150.4	83.7	399	0.2	3.77

\* 昭和33年8月11日 第19回例会で発表

2. 成熟期におけるクreek地帯  
と中山間地の稲株の比較

昭和32年度の水稲についてクreek地帯と対照的に生

(A) 比較の株採取抜取の第2表

生産者	項目	一株穂数の内訳					株			主			稈			
		全	一	二	三	四	主	比	重	長	穂	穂	穂	穂	穂	穂
		重	重	重	重	重	数	%	g	cm	数	数	数	数	数	数
平島仁助氏		104.3	47.7	56.6	84.3	17.3	2.7	11.3	3.3	28.4	20.4	3.2	117.0	7.5	9.3	85.6
熊丸連蔵氏		76.3	32.3	44.0	73.4	21.0	5.0	16.0	—	73.6	18.8	2.2	78.3	6.4	9.4	79.8
熊当		77.8	35.9	41.9	85.7	18.7	3.7	13.3	1.7	74.5	19.6	2.4	89.9	5.9	9.3	83.1

(B)

生産者	項目	主節間長(上から) cm							千粒重 g		稈の長さ mm		玄米の大きさ mm		
		1	2	3	4	5	6	7	玄米	籾	長	厚	長	厚	
平島仁助氏		32.3	18.6	12.9	8.9	5.5	1.3	0.4	30.7	25.7	4.6	5.0	5.29	3.08	2.14
熊丸連蔵氏		30.3	17.1	10.4	7.2	4.9	1.7	0.2	29.9	24.8	3.6	5.1	5.22	2.97	2.03
熊当		30.5	18.0	10.9	7.1	4.2	1.3	0.1	29.5	24.6	—	4.9	5.27	2.94	2.06

育すると考えられる中山間地の平島仁助氏の稲株について調査を行った, その結果は第2表 A, B に示す通りである。

これらの各要素について個々に比較検討すると

a) 1株全重

中山間地の平島仁助氏の稲株は 104.3 g で籾重, 稈重共に重く, 熊丸連蔵氏の全重より 28 g も大きく出来ていた。特に籾重の開きが大きく, 籾重比の高い比較的合理的な稲株が中山間地に出来ていた。

b) 穂数

クreek地帯における収量構成要素の中勝っている要素はこの穂数のみで株張りが良く 1株穂数においては 3.7本, 又坪当穂数については 130本も多く出現していた。次に 1株穂数の内訳を見ると主稈本数が異なるので直接の比較は出来かねるが, クreek地帯の稲は大部分が 1次分蘖によつて占められ, 2次分蘖の有効比される率が少ないものの様に思われる。

c) 稈長, 節間長

主稈について稈長, 並に節間長をみるとクreek地帯の節間長はあたかも秋落地の様な開きがみられる, 下位の 6.7 節間長は稍長いが, 上位の節間長は短かく稈長に至つては, 8.8cm も低くなつていた。次にこれら主稈の基部の太さを第 1 伸長節間について比べると, 中山間地の稲は比較的まる味をおびた太い大きな茎であることが認められた。

d) 穂長, 一穂着粒数

穂長は前者と同様にクreek地帯の稲が劣つていたが特に第 1 次枝梗数が少く, それに伴つて 1穂粒数も極めて少く 78.3 と 38.7粒 も大きく劣つていた。又稈実も悪く稈実歩合は 5.8% も低かつた。

e) 玄米の大きさ

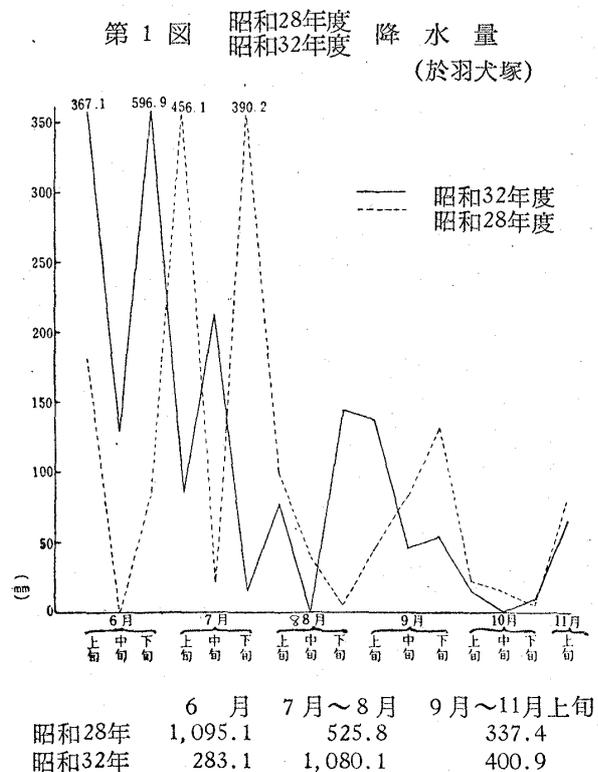
クreek地帯の玄米は全般的に小型で, 特に巾と厚さにおいて大きな開がみられ, 千粒重については 24.8 g と 0.9 g も中山間地より少なかつた。以上各要素について両地帯の稲を比較して来たが要するにクreek地帯の稲は中間地に比べ初期生育は良好な様に思われるが特に生殖生長に入つてからの生育が悪く, 短稈, 短穂, 1穂着粒数の少い稈実, 発熟の悪い否生産的な稲の姿を形作つている様に考えられる。

3. 降水量の多少とクreek地帯の反収

昭和33年の 5月より調査を始めた若干の資料にもとづくとクreek地帯の地下水位はクreekの水位に左右されるものの様に見られる。故に降水量の多少と地下水位の高低はクreekの水位をつうじ常に関連をも

つている様に思われる。

このようなかんてんより最近の米作日本一競作会の県1位と降水量の多少との関係を見ると第1図にも示



してある様に最つとも多収であつた昭和28年度は苗代期間中は低温、寡照に過ぎ苗代末期の6月下旬には未曾有の大水害に見舞はれたが本田插秧後は高温多照に恵まれ、県内にも処々に早魃の被害があつた位に降水量が少なかつた。それに反し昭和32年度は苗代期間中は順調に経過したが、插秧後は曇雨天多く寡照で、屢々浸水する如きクリークの水位であつた。この様にクリーク地帯の反収が降水量も多少、なかんずく地下水水位の高低と比較的密接な関係をもつていのは前九州農業試験場長佐藤健吉氏が昭和18年から3ヶ年間行つた早魃時期試験の成績にも述べられている様に、地下部への酸素の供給多少が最つとも大きく影響している様に思われる。即昭和32年度の如くクリークの水位が全期間満水の状態では4~5尺にも伸びた多量の根が高い地下水位の為に障害を受け不作形の稲姿となり、成熟期に「カレウレ」の様になるのではなかろうかと考へる。

4. む す び

以上に述べた他に幾多の条件があるものと思うが、昔からクリーク地帯に“早魃に不作なし”という諺もある通り地下水位の高低が根の活力に大きく関係し、地上部。地下部のバランスが破られる所にクリーク地帯稲作の大きな盲点がある様に思われる。

災害対策としての晩期株分け移植及び  
極晩播稚苗移植について

瀬古秀生・吉岡寿満二  
阿部新一・波津久文芳  
(九州農業試験場)

水稻移植後において改植を必要とする程度の被害をこうむる諸災害の発生は極めて多く、その災害発生の時期がおそくなる程対策樹立について困難を極めていのが現状である。著者等は災害対策として改植を考へ得るもののうち、時期的に恐らく限界期であろうと思われる時期の株分け移植及び極晩播稚苗移植の2つの試験を取上げ、1957年に試験を実施した。

I 災害対策としての株分け移植試験

1) 試験方法

水稻晩生種アサカゼを供試し、第1表のような試験区の構成で8月5日と、8月10日の2回試験を実施した。供試水田は7月3日35日苗を坪当株数56.3株、1

第1表 試験区の種類

記号	処 理 方 法	坪当株数	栽植距離	
A	母 田	2条を残し1条を抜き去る	37.5株	
B		3条を残し1条を抜き去る	42.2	
C		4条を残し1条を抜き去る	45.4	
D		現状のまま生育させる	56.3	8×8
a	移 植 田	親田の株を株分けせずそのまま再移植する	44.5	9×9
b		親田の株を株分けし、その3/5を再移植する	56.3	8×8
c		親田の株を株分けし、その1/5を再移植する	73.5	7×7

註 親田は1株3本植、植換田の一坪当の所要親株数は a 44.5株、b 37.5株、c 24.5株である。

\* 昭和33年5月10日 第18回例会で発表